

中山服に見る中国ナショナリズムの始動

張 玲

近年、中国では衣装と関連するナショナリズムの高揚が頻繁にみられた。例えば日本の和服を着ることで大学キャンパスへの進入が拒否される等のトラブルが相次いで発生した一方、中国古代漢民族の伝統服装である漢服が中国全土で熱狂を巻き起こし、漢服を「国民服」にする漢服運動までに発展している。中国ナショナリズムは服装と異常と言えるほど緊密に関連している。

「ナショナリズムとは、第一義的には、政治的な単位と民族的な単位が一致しなければならない」（アーネスト・ゲルナー 2001:1）。ナショナリズム (nationalism) は文脈に応じて国家主義、民族主義、国民主義と訳され、その意味は多様な側面を持っているが、丸山は「ナショナリズムとは、ネイションの統一、独立、発展を志向し、推し進めるイデオロギーおよび運動」と定義した (丸山2006: 279)。「ナショナリズムがネイションに先行する。ネイションが国家やナショナリズムを創り出すのではなく、その逆である」（アンダーソン 1997:44）。すなわち、ナショナリズムを醸成するため、ネイションが「想像される共同体」として作り出した。そしてそこで重要になるのは、その想像の真偽ではなく、想像されるスタイルなのだ (アンダーソン 1997)。この想像されたネイションを具現化させるため、19世紀末から20世紀に至る植民地解放・独立運動そして近代国家の形成過程において、トップダウン方式で国民の外見と服装に関する改革は第三世界の諸国で一般的に行われた。

中国に即してみれば、1912年に中華民国が成立した後、初代大統領である孫文による服装改革が周知されている。孫文は服装が新しいネイションである「中華民族」を創造する要と理解し、服装に関する法令を公表し、

「中山服」を創出した。孫文が亡くなった後、後任の蒋介石は1929年に「文官制服礼服条例」を公表、国の公務員に中山服を制服として着用する義務を要求した。

蒋介石の国民党政府は内戦に負け、1949年に中華人民共和国が成立した。1949年10月1日に行われた中華人民共和国の成立式典において、毛沢東をはじめとする多くの共産党指導者たちは中山服を着用し、式典に臨んだ。その後、中山服は人民服と改名され、政治エリートたちの標準服装として愛用されていた。文化大革命の時期には、「良俗を乱す」チャイナドレスや「西洋崇拜」のスーツ、「封建主義の毒」とされる長衫はいずれも次第に淘汰されたが、「人民服」は数少ない社会主義イデオロギーに合致する服装と認識し、1980年代末まで中華人民共和国の男性国民の正装として広く使われた。現在でも、中山服を着用する国家主席習近平の姿はニュース報道でよくみられる。

中華民国と中華人民共和国において、国家の主体とされる中華民族と政治首脳の表象に一貫した「中山服」の着用は何を意味するのか、なぜ中国のナショナリズムは服装と異常と言えるほど緊密に関連しているのか。これらの問題を根底から追究、すなわち「中山服」を掘り下げて考察することにより、我々は現在高騰している中国のナショナリズムをより深い層面で理解することができると言えよう。そして「中華民族」の自他意識が内側からどのように構築されたかという「内部者の視点」を獲得することもできると言えよう。

小野寺が指摘したように、現在の中国のナショナリズムの起源に関して、主に二つの視点がある。一つは、1990年代以後の愛国主義教育に代表される、中国共産党政権の政策によるとする見方である。政府が人民の不満をそらすため、或いは共産党内部の権力闘争のためにナショナリズムを発動した。新聞ニュースの報道はこのような立場をとるケースが多い。もう一つは、過去から続く中国の社会構造やその伝統思想・文化・歴史に帰結する見方である（小野寺2017 ii）。たとえば西村は、「今までの天下的国家観念が近代国民国家観念の衝撃の中で新たな適応を遂げ、一つのネイションとしての中華民族を内容とする国民国家形成への起点を構成した」と指摘した（西村2000:26）。

中国の社会構造やその思想・文化・歴史から中国ナショナリズムの形成を追究する研究において、服装は要素の一つとして取り上げて議論されたが⁽¹⁾、服飾を中心に深く掘り下げて考察する論考は比較的に少ない。中国では関連する論考例えば林昊民ら（2020）、劉建民（2022）などもあるが、言論統制の環境の中で、国家の立場を離れて、批判的な検討を行ったものはほぼないと言える。そこで本稿は近代中華民国の成立と共に「中華民族」とその象徴である「中山服」はどのように登場・発展していったのかを詳細的に考察することにより、脱植民地の国民国家と中華民族の形成を目指した中国ナショナリズムはなぜ服装とこんなにも緊密に関連しているのか、中国ナショナリズムの始動とその内包している矛盾、後の中華人民共和国に与えた影響を明らかにする。

本論は四つの部分に分けて議論を進める。まずは、伝統中国の服飾観念及び服制を紹介した上で、清の衰退に伴い、エリートたちによる強盛国家と服装変革の構想が絡み合い、競合していく歴史過程を概観し、中山服誕生の歴史背景を整理する。そして、中華民国の「服制条例」を掘り下げて考察し、孫文をはじめとする革命派は政権握った前後において、服装に関する主張の変化を分析することにより、新国家の指導者たちは「ネイション」に対する認識が、単一漢民族による国家から各少数民族平等共存の「五族共和」へ、さらに「五族共和」から一つの「中華民族」へと変化していくことを明らかにすると共に、その変化の原因を見出す。

第三部分では、中山服を創出した歴史経緯を考察し、「国民服」にめぐる歴史紛糾を検討することにより、西洋文明の象徴としての「スーツ」と中国伝統服装の長袍馬褂の間にある「スーツ＝進歩・文明」「伝統衣装＝腐敗・後進」の二項対立はどのように形成されたのか、文明の象徴である「スーツ」はどのように西洋侵略者の文明の象徴に転落し、西洋文明と中華文明との対立構造はどのように形成したのか、孫文はどのような思いを「中山服」に託したのかを明らかにし、近代中国の文化ナショナリズムの誕生を明白にする。

(1) たとえば吉澤誠一郎の『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』深町英夫の『身体を躰ける政治：中国国民党の新生活運動』、西村成雄の『現代中国の構造変動3 ナショナリズム—歴史からの接近』、小野寺史郎の『中国ナショナリズム—民族と愛国の近現代史』などがあります。

最後に、中山服が国民服として普及していく過程及び新生活運動を考察し、孫文の後任である蒋介石が身体政治を展開することで、自身の権力基盤を固めると同時に、党国一体化思想を浸透させる過程を析出する。

一 中山服誕生の歴史背景

1 古代中国の王朝統治と服飾制度

『易・系辞下』によると、黄帝と堯と舜、この三人の統治者は天地運行の自然規則に従い、衣装の規範を民に示し、天下を支配した（原文：黄帝堯舜垂衣裳而天下治，蓋取諸乾坤）。この記述から、先史時代の中国はすでに服飾を王朝統制の一環として取り入れたことがわかる。西周時代（紀元前1046～紀元前771年）において、完備した服飾制度が作り上げられ、官僚は身分による「冕服」の着用が厳格に区別され、親族の間柄や周辺少数民族政権との親疎関係を類別する「五服制」が制定された⁽²⁾。周の服飾制度は「礼治」（礼儀作法を手段に民衆を統治する）の一環とされ、歴代の王朝により継承された。

一方、王朝交代をする際に、従来の服飾を変革することで統治の正当性を強化することも行われていた。清王朝が実行した「剃髮易服」はその典型である。1645年5月、少数民族（満州族）政権である清王朝は、漢族への支配を強固にするため、「剃髮易服」の法令を公表、漢族の髪形と服装を満州族の様式に強要し、漢族からの抵抗を鎮圧するため大虐殺を行った。「江陰81事件」と「嘉定三回大虐殺」などは有名である。このように、中国では服装を民の教化手段として使われて、そして民にとっても服装は帰属意識を表すものだという認識は、古くから存在し続けていた。

2 清の衰退に伴う強盛国家の構想と服装変革

18世紀中盤から、中国最後の封建王朝である清王朝は衰退の兆しを見せ始めた。国内では、汚職の横行による民衆の反乱は蜂起し、「白蓮教徒

(2) 五服制について、馬大正編2000『中国辺疆経略史』中州古籍出版社；李雲泉2004「五服制与先秦朝貢制度的起源」『山西師範大学学报（人文社会科学版）』2004年第1期；張利軍2017「五服制視角下西周王朝治辺策略与国家認同」『東北師大学報（哲学社会科学版）』2017年第6期を参照してください。

の乱」や「太平天国の乱」は清王朝の統治に大きな打撃を与えた。国外では、西欧諸強国がアジアに進出し、次々と清王朝に戦を挑んだ。清王朝は一連の戦争に敗北し、不平等条約を強いられ、半植民地の道を余儀なくされた。国家存続の危機から脱出するため、政治エリートたちによる多様な強盛国家の構想が競合しており、それと関連する服飾改革の声が高まった。

1898年に立憲君主制国家の樹立を目指して、光緒皇帝は則近の改革派である康有為らと共に、トップダウン方式で「戊戌の変法」と称される一連の改革を行った。その中で、服飾も改革の一環として議論された。1898年9月、康有為らが光緒帝に「断髮易服改元」を上奏し、「新たな朝代が始まる際には、必ず曆法を改め、服制を変え、礼器や武具を新たにすべきであり、皇帝自身が率先して辮髪を切り、スーツを着用し、断髮令を公表し、実行すべきである。そして官僚たちの官服も変えるべきだ、体にフィットして動きしやすいスーツは、各国との競争に有利に働き、世界の潮流にも適応する⁽³⁾」と力説した。

この「体制内」的断髮洋装論は、戊戌変法の失敗により実現されなかった。一方で、満州族の政権である清を打倒し、共和制を樹立すると主張したのが革命派である。革命派の基盤は帰国した留学生や国内の知識人で、彼らは立憲派と同じく、服装及び髪形の変更を国家変革の要項として、自ら提唱・実行した。

たとえば、日本から帰国した留学生が作成した雑誌『湖北学生界』の第三期（1903年刊）には、「剪辮易服説」を題とする投書が掲載されている。このなかで、清朝が辮髪を強制した歴史を振り返りつつ、断髮は政治改革の先決だ。衣服も洋服に改め、清王朝の人々が持っていた特徴的な外見を捨てることで、政治を根底から改革する気運を高めて、次第に欧米列強と平等になる世界に進めると主張した⁽⁴⁾。辛亥革命により、清王朝は滅亡した。その直後の社会状況について、新聞は次のように報じた。「革命者の多くは海外から帰国した者で、西洋式の衣服靴帽は日常生活の愛用品で何の違和感もなく着用されている、政治家たちは、西洋風潮に追随しないと

(3) 湯志鈞編 1981『康有為政論集』中華書局

(4) 「剪辮易服説」は1903年に刊行された『湖北学生界』第三期に掲載、その後は張樹、王忍之編 1960『辛亥革命前十年間時論選集』第一巻の上冊 三聯書店に収録された。

革命派として認められないと思っているようだ。余裕があるものはスーツ数着を持つことで維新の姿勢をアピールしている」⁽⁵⁾。

立憲君主制を主張する保皇派と共和制を目指す革命派は、共に断髪と洋装の着用を改革の重要な一環として位置づけていたが、その内実は異なっている。保皇派は清王朝の統治を維持しようとし、西洋式の髪形・服装を中国伝統社会の習俗に導入することを、体制内部の改革の起爆剤と見なしていた。一方、革命派は、中国が列強の圧迫に対抗しえない原因は、満州人という異民族の支配にあると帰結し、清の支配を倒すことは中国復興の先決条件だと主張した。従って、辮髪を切り、服装を洋装に変えることには、清王朝を打倒し、満州族を排除する意味が込められた。

辛亥革命の勝利後、多くの地方軍政府が最初に公表した命令は断髪令であった。「満洲王朝の野蛮な象徴である辮髪を切り、我々漢民族の国の回復を祝おう」と命じた⁽⁶⁾。1912年1月に中華民国は南京で成立した。同年3月に臨時大統領である孫文は『大統領令内務部曉示人民一律剪辮文』を公表し、男子の辮髪は野蛮の象徴であり、衛生にも好ましくないとして、国民に対して辮髪を切ることを要求した。

革命派は断髪を素早く実行したが、服装の変更(易服)については、「民国の新建設は、速やかに服装を規定し、一律化すべきだ。現今、世界各国は洋式の趨勢にあり、同様にすることが望ましい」(『申報』1912年8月20日)という民間からの要請があったにもかかわらず、「服制条例」の公表は多くの時間を要した。新政権における新国民のイメージの創出において、革命派の思慮深さはここで見られた。

当時の人々の着衣状況について、新聞紙は次のように述べた、「辮髪は切られ、満清の伝統服もなくなったが、人民はかえってどうすればいいのかわからなくなった。一時期、中国人は何でも身に着けていて、…西洋服、東洋服、漢族服、満族服、なんでもありで、名状しがたいほどの混乱」だったのである(「大公報」1912年9月8日第二版)。

1912年10月3日に「服制条例」がようやく公表された。この条例は、

(5) 「論維持国貨」大公報天津版1912年6月1日 第2版

(6) 「内務部関于一律剪髮暫不易服的告示」『湖北軍政府文献資料彙編』武漢大学出版社1986年版第721頁

従来の身分に応じる着装の規定を一蹴して、大統領から平民まで礼服の様式を一律とした。また、男子の礼服は大きく二つに規定された。一つ目は大礼服で、これはイギリス式の燕尾服（宴会服）である、二つ目は常礼服で、これは清末の長袍馬褂とスーツの二種類が定められていた。女性の礼服は、満州族女性の伝統様式である前開きの長衫とロングスカートに指定された。そして、男女の礼服は共に国産の生地を使うことが命じられた。

この「服制条例」は、孫文と当時中国繊維産業界の妥協案であると指摘できる。1912年に成立した「中華国貨維持会」は、その成立宣言で、「新政府による服飾制度が定められていない中で、人々はスーツを求めている。しかし、スーツの生地は毛織物で、国内の生産はほぼない、このままだと、我々のお金は海外に流出し、国産生地は衰退していく」と述べた（邱巍2000）。

孫文も1912年に「中華国貨維持会」への返信で、「礼服は国家と緊密に関連しており、軽率な行動を慎みましょう。しかも現在のスーツにも満足できない部分がある。礼服に関して、その衛生面や機能性、さらにはデザインがよく、経済にも有利に働くことを重視すべきである」⁽⁷⁾と注意を喚起した。同年10月の「服制条例」でも、スーツと並び長袍馬褂も礼服としながら、その色は黒で、国産の生地を使うと強調した。

他方、保皇派と革命派とは異なり、臨時大統領の袁世凱は、中国古代のような漢民族による中華帝国の復活を目指していた。袁はもともと清王朝の高級武将で、宣統帝の退位と引き換えに大統領の座を孫文から譲りうけ、1912年3月に中華民国の臨時大統領となった。強権を振るうとする袁世凱を制限するため、革命派の宋教仁は議院内閣制を主張し、国民党を統率して1913年2月の総選挙で圧勝したが、翌月に暗殺された。

大統領の権力に対する制限に不満を持ち、袁世凱は中華帝国の帝政を復活させようと動き出して、1913年末には国会内の国民党議員を全員解任した。1914年8月に『暫行祭祀冠服』を公表し、清王朝により中断された漢民族の伝統的な「服制」を採用した。1914年12月、袁世凱は自ら漢民族の伝統服装である漢服を着用し、皇帝即位の祭天礼を行った。そして

(7) 中国社会科学院近代史研究所等編「孫大總統復中華国貨維持会函」（1912年2月4日）『孫中山全集』第2巻、中華書局1982年版第61-62頁

1915年末に袁世凱は皇帝と自称し、翌年には中華帝国の成立を目指すことを宣言した。

しかし帝政を復活させようとする試みは国内外からの強い反発を招き、袁世凱の支持基盤である北洋軍閥さえも彼に反旗を翻した。仕方なく、袁世凱は1916年3月に皇帝即位の決定を撤回し、失意の中で間もなく病死した。袁世凱の死後、馮国璋、徐世昌、段祺瑞などが相次いで政権を握り、北京で中華民国の正式政府として存続したが、いずれも中国全体をまとめる力を持ちえず、各地方の軍閥による軍閥割拠の時代に突入し、新国家及び新国民の創出は依然混沌・混乱の状態にあった。

二 中華民国の「服装条例」に見る「ネーション」の構想

1 「単一漢民族国家」から「五族共和」へ

1912年10月3日に公表された「服制条例」により、中華民国の男子の常礼服は、清末の長袍馬褂とスーツの二種類が定められていた。

先述したように、中華民国成立以前、革命派は「断髮易服」、すなわち清王朝の特徴ある外見を一新することを近代国家の出発点としていた。しかし、中華民国成立後に政権を握った革命派は、長袍馬褂を国民の礼服と定め、満清王朝の姿を維持しようとした。この言行不一致は何を意味するのか、次では、政権握った前後での革命派の変化について、詳しく説明する。

孫文は満洲族による清王朝の打倒を目指す革命派の指導者であり、中華民国時代では国父と称され、中華人民共和国時代においても「偉大な革命家」と尊敬されている。

孫文は1866年に広東省香山県（現中山市）の貧しい農家に生まれた。1878年に兄の孫眉の呼びかけにより、母と共にハワイへ行き、同年9月にはイギリス教会が経営するイオラニ学校に入学したが、学校では中国式の衣装や辮髪のでいで、よく揶揄われていた。嫌がらせから逃げたかったためか、少年孫文は学校で貪欲に西洋文化を吸収し、英語も急速に上達した。1882年7月に卒業する際には、英文法の試験で第二位の成績を取めた。教会学校の教育を受け、孫文は次第にキリスト教に傾倒した。それを嫌った

孫眉は孫文を中国に戻した（深町2016）。

海外で外観や人種の原因で受けた差別により、孫文は抽象的な民族としての中国人に対して自己を帰属させる意識を抱いた（深町2016：12）。そして帰国後目にしてきた国家の惨状に、孫文は次第に中国社会の変革を志すようになった。1894年孫文は革命有志と共に革命団体である興中会を結成し、興中会は「撻虜を駆除し、中華を回復し、合衆政府を創出する」を宗旨とした。孫文の轍を踏み、1904年蔡元培らは「漢族を回復し、我が山河を取り戻す」を宗旨とする光復会を設立した。黄興なども「撻虜を駆除し、華夏を回復する」を宗旨とする華興会を設立した。そして1905年、興中会は華興会、光復会と合流し、「撻虜を駆除し、中華を回復し、民国を創立し、地権を平均する」を綱領とする中国革命同盟会（略称：同盟会）として再編された。

これらの革命団体のスローガンから見て分かるように、革命派が共通かつ一貫していた目標は「撻虜を駆除し、中華（華夏）を回復する」である。「撻虜」は満州人の蔑称で、「中華」と「華夏」は一般的に類語として使われて、国家を意味する。

「国家」の内実について、革命派と立憲君主制を主張する保皇派は何度も論争を繰り広げる中で、ネイションの範囲を先に決定し、その範囲に沿って国家を建設するのではなく、国家の範囲（既存の清の版図）を前提として、その範囲に沿ってネイションを設定するという認識に辿った（小野寺2017:61）。1907年に章炳麟が「中華民国解」⁽⁸⁾の中で、次のように述べた、「華といい、夏といい、漢といい。互に三つの意味を持ちあう。漢を族名にしてもそこに邦国の意味があり、華を国名にしてもそこに種族の意味もある」。ここで中華の「国家」は「漢族」と同じサイズとして理解された。すなわち中華民国は、事実上漢族による単一民族国家であると理解された。

古代と同様な単一の漢民族国家の樹立を目指す、そのような思いを、服装にも託した。鄒容は著作『革命軍』に次のように述べた。

中国は中国人の国である。野蛮な異民族は我々の中国を奪う、我々高貴な血統を持つ漢民族の権利を侵害した。我々同胞は命を惜しまず、権

(8) 『章太炎全集』第四卷 上海人民出版社1984年

利を取り戻すため彼らを追放せよ。

……ロンドンの街をいくと、道行く人でpig tail (豚の尾)、savage (野蛮) と言わぬ者がなく、東京の街を行くと、道行く人でチャンチャン坊主と言わぬ者がなく、昔漢唐時代の美しい衣装と威厳に満ちた姿はすっかりなくなった。今自分の辮髪、自分の服装をみるたびに、痛心に耐えない。⁽⁹⁾

鄒容の『革命軍』の発行数は百万部以上に昇り、革命派に大きな影響を与えた。中華民国成立後、孫文は臨時大統領として、亡くなった鄒容を陸軍大將軍に追認した。その表彰令では、「鄒容は国民が醉生夢死の時に、『革命軍』を書き、人々の思想に大きな影響を与えた。今日我々の功績は、実は彼のおかげである」と述べた(馬多思 2011)。『革命軍』の影響で多くの革命者は当初から自発的に辮髪を切り、清の衣装を捨てた。現存の歴史資料にある孫文の写真を考察すると、晩年を除き、中国社会の変革を志した以来、公の場で孫文は主にスーツと日本仕様の学生服を着用していた。満清の服装を使用しないことは彼の心の中にある「ネイション」の構想を端的に示したと言えるだろう。

しかしながら、単一漢民族国家の樹立を目指したにもかかわらず、革命が成功した後、新国家により公表された「服制条例」では、なぜか捨てるはずだった清末の長袍馬褂は、中国人の礼服として使用することが命じられた。新しい中国人のイメージ塑造に、革命派の主張の矛盾はそこに現れた。言い換えれば、単一漢民族国家の構想の破綻はそこに見られた。

「ネイション」の構想に関して、孫文をはじめとする革命派の思想の変化は、1912年1月1日に行われた臨時大統領の就任式典でより明確に見られた。式典で孫文は次のように宣言した、「漢、満、モンゴル、回、チベットの五民族の住居地は合わせて中国の領土となり、漢、満、モンゴル、回、チベットの五民族は合わせて中国の国民となる」(『中華民国臨時大統領宣言書』)。そこで新国家は単一漢民族の国家ではなく、「五族共和」を唱える国家であることが明確に示された。このような思想の転換の原因は、辺境地域の少数民族と清王朝の版図を中華民国の領域に引き留めたいとの

(9) 鄒容 2002 『革命軍』華夏出版社

思いにあると指摘された。(深町2016)

2 「五族共和」から「中華民族」へ

清王朝の領土をそのまま継承するため、革命派は単一漢民族の国家の発想から「五族共和」へと転換した。中華民国建国当初提唱していた「五族共和」は、民族平等の「五族共和」である。1912年3月11日に公表された『中華民国臨時約法』（臨時憲法に相当）の第五条「中華民国の国民はすべて平等で、種族、階級、宗教による区別がない」は民族平等の主旨を法律で明確した。同年3月黄興、蔡元培、宋教仁など革命派の指導者たちは南京で「中華民族大同会」を成立、その主旨は「五族の交流を図り、民族間の差別をなくし、統一国家を目指す」⁽¹⁰⁾とした。臨時大統領を務めていた孫文も1912年9月に北京で行われた演説の中で「五族は兄弟のように仲良く、国政に参加することを希望している」と述べ、その後のいくつかの演説の中でも五族平等・融和の理念を明白に示した⁽¹¹⁾。

しかしながら、1919年に孫文は上海国民党本部会議の演説の中で「五族共和」を次のように批判した。「この五族という呼び名は極めて不適切だと感じる。我が国において、五族だけでは納めるのか？私は中国のあらゆる民族を一つの中華民族融和しなければならない、そして中華民族を文明的な民族に育てなければならないと考えている」⁽¹²⁾。

1923年の国民党宣言でも「清王朝は滅亡したが、我が国は列強の植民地に陥った。それゆえ、我が党の民族主義の主張は、消極的に言えば、それは民族間の不平等をなくすこと、積極的に言えば、それは国内の各民族を団結させて一大中華民族になること」と明言した。ここで、中国の「ネイション」の構想が、平等な「五族共和」から一つの「中華民族」へと収斂していく転換が明白に提示された。

1919年以後、孫文らが提示した「中華民族」は実体を持たない民族であり、まさに想像される「ネイション」である。この想像されるネイションを具現化することは、孫文が「中山服」を創出する動機の一つだと考え

(10) 湖南省社会科学院編「与劉桜一等發起組織中華民族大同会啓」『黄興集』中華書局1981年版第147頁。

(11) 『孫中山全集・第七巻』人民出版社2015年版第105-107頁

(12) 「在上海国民党本部会議の演説」『孫中山全集』第五巻 中華書局1985年版第394頁

られる。1919年を境に孫文は「五族共和」に異議を唱え、1920年代中期に「中山服」は姿を現した。両者には時間の関連性も見られた。

では、「ネイション」の構想に関するそのような転換はなぜ生じたのか？ 深町は、「五族共和」の論理自体が国家分裂の契機を孕んでいるとして、孫文は認識を修正したと指摘した（深町2016）。この見解を当時の中国が直面していた国内外の状況と関連つけて考えると、より明確的に理解することができる。

1914年から1918年にかけて、第一次世界大戦が勃発し、「オーストリア＝ハンガリー帝国」と「オスマントルコ帝国」は敗戦国となった。両大帝国内部で頻発していた民族間の衝突を処理するため、アメリカのウッドロー・ウィルソン大統領は、十四か条平和原則の中で「民族自決権」論を提唱した。当時中華民国でも、辺境少数民族のモンゴルやチベットの独立運動が活発に行われ、領土の分裂が現実になりつつであった。「民族自決」という国際的な潮流の中で、「五族共和」は中華民国にとって不都合な論理であった。なぜならば、各民族は合意・同意を前提に国家建設に参加とすれば、合意がない場合は、民族の自決権利を尊重すべきだからである。少数民族は自分の「民族国家建設」の根拠を見出す恐れがあった。

辺境地域及び少数民族の分裂を避けるため、孫文は新しい「中華民族」を創出しなければならなかった。しかし、深町が指摘したように、中華民国が成立してから再び打ち出されたこの「中華」は、清朝末期の革命派のスローガン「撻虜を駆除し、中華（華夏）を回復する」での「中華」とは違う、当時の考えは満州族を中国から駆除し、漢民族による単独の民族国家を目指すものであったが、中華民国時代の「中華」は少数民族を団結させた融和のシンボルであった。すなわち同じ「中華民族」と言っても、排除の中華から融和の中華へと転換したのである（深町2016）。

一方、1919年以後提唱された融和の「中華」について、孫文は1921年中国国民党本部広東事務所設立を祝う演説の中で次のように述べた「現在、我々は民族主義を語る時、五族を適当に喋るよりは、漢民族的な民族主義を提唱すべきである。満州族、モンゴル族、回族、チベット族を漢民族に同化させるため、民族主義について、我が党はもっと研究しなければならな

い」⁽¹³⁾。ここで孫文が考案していた「中華民族」は、漢族単一の中華民族から拡充された概念であることが読み取れた。すなわち中華民族という創造されたネイションは、漢族中心主義という性格を持たせていた。「孫文は中国内部のエスニック的多様性や中国領内の各民族の一律の平等といった問題に対する認識や関心が低く、漢人による単一民族国家という志向を持ち続けていた。こうした傾向は程度の差こそあれ孫文の後継者たちにも引き継がれていく」(小野寺2017:110-111)。中華人民共和国においても、共産党政権の少数民族政策は孫文思想の延長線にあると言えよう。

三 「中山服」の創出と中国の文化ナショナリズムの形成

1 文明を象徴するスーツと野蛮を象徴する長袍馬褂

近代以前の中国は有数の大帝國であり、アジア文化圏の中心であった。中華帝國の世界観は、文化の中心である「中華」と文化の周縁にいる「夷狄」により世界が構成されて、中華の有徳な皇帝に感化された周辺の国々は貢物を捧げて臣従を示し、皇帝はそれを認めて冊封儀式により双方の関係を安定させる。国家間の関係は君臣関係に見立てたフィクションという面が強かった(小野寺2017:6)。

しかしながら、19世紀になると、資本主義の飛躍的發展を遂げた西洋の外圧は強まり、アヘン戦争で市場開放や各地の開港を迫られ、外国人は中国での旅行権、キリスト教の布教権を得た。西洋文明の侵入により、中華の世界観が大きく揺らぎ始めた。清王朝内部では「夷狄の技を学び、その技を持って夷狄を制す」との声が上がり、西洋文明の導入が正当化された。西洋近代が要請した外交、軍備、交通、人材育成などの領域で西洋に学ぶ「洋務運動」が高騰していた中、西洋式の軍服が導入された。まずは1888年に北洋海軍の軍服は一足早くイギリス海軍の様式を採用した。民間ではスーツは海外から帰国した留学生から一般庶民まで迅速に普及した。1930年代になると、上海だけでスーツの売店は420ほどに上った。スーツ生産販売業者の組合も誕生した⁽¹⁴⁾。

(13) 『孫中山全集・第七卷』人民出版社2015年版第344-345頁

(14) 中国近代紡織史編纂会1997『中国近代紡織史・下巻』中国紡織出版社173頁

一方、清王朝の辮髪と長袍馬褂は野蛮の象徴として、猛烈に批判された。前述した鄒容の言論はその代表である。スーツ＝西洋・文明、長袍馬褂＝満清・野蛮という二元対立の認識は革命派の中顕著に見られた。1912年1月に臨時大統領に就任して間もなく、孫文は政府内部に「外国人と交渉する官僚は一律スーツを着用しなければならない」⁽¹⁵⁾と通告した。同年10月に「服制条例」を公表し、スーツを中国人の礼服とすることを明記した。明らかに、新国家の新国民のイメージ創造に、臨時大統領の孫文は清の「長袍馬褂・辮髪」姿から「西洋風貌」へと変更しようとしていた。明言していないものの、孫文自身も人生のほぼすべての重要な場面で西洋式服装を着用した。宋慶齡との結婚式、臨時大統領の就任式典では西洋式の礼服を着用した。死後、彼の遺言により、その「死装束」さえイギリス式の燕尾服であった⁽¹⁶⁾。中国の国民の姿について、孫文は西洋文明の一員であることを理想としていたと言えるだろう。

しかし、都市部の男女の盲目的西洋崇拜がシルク等の国産布地の売れ行き不調を招き、スーツの近代性の背後に潜む西洋帝国主義の経済侵略は心配の種となり、国内の産業界、特に紡織業はスーツの推奨に反対の声が上がった⁽¹⁷⁾。

国内産業を守るため、孫文は同年10月に公開された「服制条例」の中で、スーツと並び長袍馬褂も礼服としながら、国産の生地の使用を命じた。だが、中西併用の妥協案は不評を買い、記者の黄遠生は「国粹保存の我々の礼服と言え長袍馬褂だ、そこで二組の洋式礼服を借りに東奔西走、借金よりも困難だった」と述べた（喬雲霞2004：34-36）。

日本の明治維新と同様に、政治体制の改革と共に、服装の同化から「西洋文明の一員」になることを夢に見ていた中華民国の指導者たちは、間もなくその夢を捨てざるを得なかった。事情の発端は「対華21カ条要求」である。

1914年第一次世界大戦が爆発し、同年の8月23日に日本はドイツ帝国に宣戦布告を行い、連合国の一員として参戦した。その後、11月に日本

(15) 「民軍政府下令凡官吏与外人有交涉者一律須衣西服」『時報』1912年2月23日第三版

(16) 著者不詳『中山先生栄哀録』上海民権書局1926年版，第10頁。

(17) 「中華国貨維持会開会詳情」『時報』，1911年12月13日第9版及び「中華国貨維持会縁起」『新聞報』，1911年12月24日，第10版に参照。

は中国のドイツ租借地および膠済鉄道を占領し、ドイツが山東省で持っていた権益を事実上継承した。中国政府は日本にドイツの利権を返還するように求めたが、これは受け入れられなかった。そして1915年1月に大隈重信内閣はドイツ利権などを中心に、袁世凱政府に対して21か条の要求を行った。袁世凱政府は、事情を国際世論に訴えたり、交渉において遅延策を講じるなどして交渉を阻止しようとしたが、諸般の圧力により、日本人顧問を置く、警察は日中両国により共同管理などとする5号条項を除き、日本の要求をほとんど受け入れた。このことを新聞により報道されると、中国国民のナショナリズムが高騰し、国民はこの要求の最後通牒を受けた日（5月7日）と受諾した日（5月9日）を国恥記念日と呼び、日本製品不買運動が全国範囲で展開された。日本製品不買運動はさらに国産製品の購買運動に発展し、中国製品の購入・使用は西洋帝国主義への抵抗の文脈で語られた。中国では、国産製品の支持運動、或いは特定国家の製品不買運動がナショナリズムの表現手段とされ、この認識はここで普及され、定着された（喬沁鈺2010：16-17）。

中国人が中国製品を使うべきだという認識が流布していた中で、かつて進歩的なシンボルと捉えていたスーツは、外国追従だとの批判を招き、嫌悪の対象となった。林語堂、郁達夫や魯迅などの著名な知識人たちは次々とスーツを揶揄、批判した。軍閥混戦の中で、スーツを着ていたことが原因で殺されるケースが発生した⁽¹⁸⁾。

スーツに対する態度の変化は、西洋文明に対する認識の変化を反映していると言えよう。憧れた「西洋文明」は次第にその先進性を失った。

2 西洋文明と中華文明との対立構造

第一次世界大戦でドイツが敗北すると、戦勝国である中国は、日本が戦時中にドイツから奪った山東省の権益の返還を期待したが、パリ講和会議で英仏米などの大国は日本が得た山東省の権益の容認が決まった。そのニュースが中国で報道されると、中国の国民は西洋諸強国が自身の利害を調整するために主権国家の権利を侵害する行為に憤慨し、5月4日には北京大学の学生によるデモを皮切りに反日運動が全国的に展開された。それ

(18) 郁達夫の「新生日記——1927年2月20日」『郁達夫日記集』浙江文芸出版社1986年版

はやがて日本製品ボイコット運動、工場のストライキへと発展した。同年6月、ついに北京政府は講和条約調印拒否、親日政治家罷免を発表した。

「帝国主義反対、我が国を愛する」をスローガンとする五四運動は全国的に展開した。この運動の展開と拡散は、中国のナショナリズムが大衆化していく過程でもある。「五・四運動の過程で中国のナショナリズムにおける反帝国主義的な色彩を帯びた」(坂元2016:123)。五四運動をきっかけに、中国ではそれまで目標にしてきた西洋文明への疑念が高まり、中国伝統文化に対する再評価の動きが広まり、知識人の間では、東西文化論争が起きた。

西洋優位者は全面的な西洋化を主張した。例えば、1933年12月9日に陳序経は中山大学で演説を行い、「今日の西洋文明は世界の文明である、中国人は精神思想から生活余暇まですべてを西洋化にすべきだ」と主張した。陳の演説は1934年1月15日の『広州民国日報』に掲載され、多くの批判を招いた。中国伝統文化の再評価を主張した論者、たとえば梁漱溟は1921年に出版した著書『東西文化及其哲学』で、自然の征服を目指す西洋文化と自然との調和を目指す中国の伝統文化は根本的に異なるものであり、西洋文化は今や多くの弱点をさらけ出しているため、西洋文化への追随を辞め、中国文化の復興を目指さなければならないと主張した。このように、それまで当然と見なされていた西洋化・近代化を目指すナショナリズムの方向性に対し、伝統の再評価という文化ナショナリズムの視点が生まれたのである(小野寺2017:102-103)。

文化ナショナリズムが高騰している状況の中、辛亥革命時期の男性知識青年の定番服はスーツであるに対して、五四運動時期の男性知識青年は一転して主に伝統衣装である長袍を着用し、長袍とロングスカーフは新青年の標準服飾となった(袁仄・胡月2010:94)。

こうした中で1929年に中華民国政府は再び「服制条例」を公表した。1912年の「服制条例」と比べて最大の変化は、スーツを礼服から外したことであった。そして立折襟で、左右二つ対称の裾ポケットをもった前開きの上着を男性公務員の制服として指定した。この学ラン仕様の服装について、1929年の「服制条例」は名前を明記していないものの、「服制条例」を公表する前、1929年4月16日に開催された第22回国務会議において、

服制問題に関する決議案の中で、制服は中山服とすることが明確に記録されました⁽¹⁹⁾。

3 「中山服」に託した孫文の思い

中山服は孫文の主導により創出されたため、孫文の別名である孫中山から「中山」を取り、「中山服」と名付けられた。先述したように、孫文は少年時代に海外で教育を受け、「西洋文明の一員」になることを夢見ていた。中華民国成立の直前、臨時大統領の座を巡る交渉について、孫文は臨時大統領の座を袁世凱に譲る条件として、断髪・易服の実行、年号を一新することを要求した。さらに、孫文は中華民国の成立が古代の王朝交代とは違い、他の近代化国家と同様に、西洋文明を学ばなければならないと強調した⁽²⁰⁾。

中華民国成立後、孫文は西洋式の服装の着用を提唱し、近代的な西洋風貌の中国人を創出しようとしたが、様々な思慮で、中西併用の「服制条例」を採用した。しかしながら、西洋式服装の全面普及を諦めなかった。1912年2月、孫文は「中華国貨維持会」への返信で、中国国民の服装をスーツに変更すれば、経済に大きな打撃を与える可能性があるとして認めた上で、西洋式服装の良さを取り入れた服装の創出は必要だと主張した⁽²¹⁾。

激動した国際・国内情勢により、アジア初の共和制国家である「中華民国」の国民の姿の設定には、孫文はスーツと長袍馬褂は共に礼服とする中西併用の服制を採用したが、五四運動後の復古主義のナショナリズムの高揚で、スーツの着用は批判された。一方で、満清王朝の遺産である長袍馬褂は歴史の舞台で居座り、外観の差別により「賤種」と軽蔑された記憶は亡霊のように甦り、孫文はそれを許せなかったのか、「中華民族」のイメージ塑造にスーツ姿の可能性はなくなったにしても、彼は「中山服」の創出により、「中華民族」の近代性をアピールしようとしたのではないだろうか。

(19) 内政部年鑑編纂委員会編1936『内政年鑑』第4巻商務印書館F十三

(20) 邱捷等編2017「与馬君武等的談話」(1911年12月27日)『孫中山全集統編』第一巻、中華書局 第148-149頁

(21) 中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室等編「孫大總統復中華国貨維持会函」(1912年2月4日)『孫中山全集』第2巻、中華書局1982年版 第61-62頁

有力な歴史証拠資料がないため、中山服の創出時間、その由来について定説がないのは現状であるが、中山服は「洋服」であることは疑いない事実である。中国伝統の平面裁断ではなく、西洋の立体裁断を採用し、人体の曲線に合わせていることが「中山服」の最大の特徴だと言えよう。

中山服の仕様のモデルについては、いくつの説がある。この中にイギリスのサファリルック、日本の学ランに由来する二つの見解は主流である(楊奎松2020；袁仄・胡月 2010；王東霞2002)。イギリスのサファリルックはもちろん、日本の学ランを根底から追究すれば、その起源も軍服である(権学俊2018：31-48)。それゆえ、中山服が軍服から始まったといっても過言ではない。「中山服のスタイルは西洋軍服の影響を受け、その後中国の軍服スタイルに影響を与えたが、軍服もまた中山服の普及と発展を促したのである(安毓英・金庚榮1999:43)。孫文は中山服を考案したときに、なぜ軍服スタイルを選んだのか。服装の機能性、すなわち動きやすさ以外に「軍国民」の考えとの関連性も考えられる。

小野寺によると、「軍国民」という言葉は日本で出版された『武備教育』という書籍に由来する。近代以後、中国人は東亜病夫と揶揄され続け、新国家の創出と共に、強健国民の育成も政治エリートの議題の一つであった。1902年蔡鍔の論説「軍国民篇」が『新民叢報』創刊号から数号にわたって連載され、蔡鍔は社会全体が全民皆兵の体制で管理し、体育の実施によって強健国民を育成することで、強盛国家という目標に達成できると主張した(小野寺2017:43)。蔡鍔の主張は革命派や知識人の間で支持を得た。孫文も同じような考えがあった。

1903年に孫文は14名の留日学生を集め、陸軍大尉・日野熊蔵らを招聘して軍事学を学ばせたことがある(深町2013:51)。1906年に孫文は「三段階革命論」を明示した。所謂「三段階革命論」とは、中国民衆の資質の低さにより民主制の実行時期尚早であるとし、国家管理を軍政、訓政、憲政の三段階論を唱えていた。最初の三年は軍政を実施し、軍政府の軍事独裁体制のもとで、国家の古い弊害を除去する。次の六年は訓政を実施し、軍政府の独裁体制のもとで、地方自治などの部分的な民主化を行い、中国の国民が民主政治の訓練を受ける。最後は憲政時代で、軍政府は権力をなくし、憲法に依拠して国家建設を行う。

孫文は軍政の期間を三年と想定していた、しかしながら、中華民国成立した間もなく、国内・国際情勢とも混乱の状態に陥った。海外では第一次世界大戦が爆発し、欧米諸強国は兩大陣営に分かれて混戦をしていた。国内でも孫文は袁世凱に大統領の座を譲ったが、袁世凱の帝政復活に反対する「護国戦争」が爆発した。さらに袁世凱の死後、中華民国政府の実権を握った総理段祺瑞は、「再造共和」を口実に中華民国の憲法に相当する「臨時約法」を廃除しようとした。「臨時約法」を守るため、孫文は広州で「護法軍政府」を成立し、「護法戦争」を発動したが、敗北した。1923年3月、孫文は再び広州で軍政府を樹立し、北京政府・北洋軍閥を打倒して全国の統一を目指す革命（北伐）を起こした。連綿と続く内戦の中で、軍政は行っていた孫文にとっては、軍事管理体制のもとで国民皆兵は理想であると言えよう。孫文はその思いを軍服仕様の中山服に託したと考えられる。

四 「中山服」の普及及び身体政治の展開

1 「中山服」の普及

先述したように、「中山服」の創出の時間について、定めがない。袁仄らは既存写真資料を考察し、中山服は1922年頃に創出され、「中山服」という名前がつけられたのは1924年以後だと指摘している（袁仄・胡月2010：116）。しかし、孫文自身は生前、「中山服」を推奨したり、公場で言及したりすることはなかった。おそらく、自らが考案した「中山服」について、孫文はそれを「国民服」とするのは時期尚早で、改善の余地はまだあると思っていたようだ（楊奎松2020）。しかし、1925年カンに侵された孫文は急逝した後、「中山服」は急に大人気となった。

中山服の流行は、政府により意図的に推進された結果だと言えよう。カリスマの指導者であった孫文を失ったことで、中国の国民は巨大な喪失感に襲われ、全国的に孫文を追悼する活動が展開された。この中で、「中山服」を着用することで孫文への敬意を示す意見も少なくない。例えば1927年官僚周文亮は「呈請改革服制以重觀瞻」の中で次のように提言した、「長袍馬褂を廃除し、中華民国の自由な気風を示すべきである。中山服は前総理孫文が創出した服装で、上品で機能性に優れる。もし中央政府が全国の

国民に中山服の着用を命じれば、つまり中山服を国民の日常着とすれば、偉大な領袖を記念することができる」(袁仄・胡月2010 :116)。これらの意見を受け、1928年3月に国民党内務部は全職員に綿製中山服の着用を要求した⁽²²⁾。同年4月には、南京市政府が職員に「孫文の精神を高揚するため、中山服を着用すべきである」と通達した⁽²³⁾。そして、1929年に中央政府は「服制条例」を公表し、中山服を男性公務員の制服にすることを明記した。

前述の通り、「中山服」について孫文自身はそれほどアピールしなかった。では、なぜ南京国民政府は積極的に「中山服」を「国民服」として押し上げようとしたのか、その原因はいくつか考えられる。まず、当時の中国では二つの政権が存在していた。一つは袁世凱以来の北京政府、もう一つは孫文が広州で樹立した軍政府である。北京政府を打倒し、国家統一することを目指して、孫文は北伐と呼ばれる戦争を二回起こしたが、二回とも失敗に終わった。広州の軍政府の権力基盤を固めるため、孫文は1919年10月に中国国民党を結成した。「国民党は、袁世凱以来の北京政府をあくまで逸脱と位置づけ、…自らを辛亥革命とその指導者である孫文の正統な後継者と位置づけ、その統治を正当化しようとした」(大野寺2017 : 118)。そのため、孫文を南北に分断された社会を統合できる領袖としての地位を確立する必要がある。孫文が考案した「中山服」を持ち上げることで孫文への崇拝を浸透させる意図が考えられる。

さらに1925年孫文が亡くなった後、国民党は蒋介石・汪兆銘らによる集団指導体制に移行した。孫文の後継者の座を巡る国民党内部の争いは水面下で展開し、孫文の思想や政策を忠実に実行することで自身の正統性をアピールする風潮は党内にあった。「中山服」を持ち上げることもその風潮の一つの表現である。

他方、スーツの凋落により売り行きが落ち込んでいた服装メーカーも、「中山服」のブームに便乗して、「中山服」を大段的に推奨した。

民衆は中山服を用意しなければならない、仕様は本物であり、値段も安い。孫文先生は生前弊社で「中山服」を注文し、好評を頂いた。

(22) 「薛内長的談話」『中央日報』1928年3月28日

(23) 「地方通信・南京」『中央日報』1928年4月9日。

弊社の中山服は孫文先生が注文した服をモデルにしている。…孫文先生の服装を推奨するため、特別な値段で提供している。注文をすれば、真心で奉仕する。（「榮昌祥の広告」『民国日報』1927年3月26日）

西洋式の「中山服」を推奨することは、当然ながら、以前スーツの推奨と同様な問題に直面するはずである。すなわち洋装の使用は中国の繊維産業に大きな打撃を与えるという問題だ。だが、中国繊維産業の進展により、当初中国国内で生産できなかった毛織物が生産できるようになり、国産の生地でも颯爽とした「中山服」の風貌を出すことが出来るようになった。

「中山服」の着用は、服装産業のみならず、繊維産業にも新たな商機をもたらした。繊維メーカーは「中山服」のために「中山呢」と呼ばれる特別な生地を開発した。「江蘇省郷土志」によると、1936年には江蘇省の102の繊維メーカーの主要商品は「中山呢」だった⁽²⁴⁾。河北省高陽県の主要産業も「中山呢」の生産であった（呉知1936：219）。

このように、同じ西洋式服装であるが、当初スーツと国内の繊維産業とは対立関係であったが、「中山服」の普及は国内の繊維産業とはウィンウィン（Win-Win）の関係となっていた。それ故、政治エリートだけではなく、経済エリートも「中山服」の着用を推奨した。1928年7月、周作人は友人宛ての手紙で、「2、3年前、孫文の就任に反対した総商会の会長は皇帝溥儀の復位を望んだが、今では孫文の銅像の鑄造を初め、商会のすべての会員に中山服の着用を要求した」と述べた（周作人1994：154）。

他方、民衆の間でも「中山服」を受け入れる素地があった。まずは斬新なデザイン、機能性が良いなど、西洋式服装の良さを取り入れつつも、民族英雄である孫文が創出したことで、西洋の服装とは一線を画し、侵略者の象徴として抵抗されることはなかった。そして、「中山服」を着用することで、孫文を記念する気持ちを表出することもできた。さらに国産生地で作られた国産服装を着用することは「国貨支持」の表現であり、中国ナショナリズムの実行だとも言える。このように、すべての利点を持つ「中山服」は急速に普及した。辺境地あるいは文化の周縁地域例えば陝西省の沔県（現在の勉県）、湖南省の懐化、雲南省の鎮雄などでも、男子が中山

(24) 王培棠編『江蘇省郷土志』上冊 第92-93頁 商務印書館 年代不詳。

服を着る姿は普遍的に見られた⁽²⁵⁾。

2 「中山服」と身体政治の展開

孫文の死後、後任の蒋介石は中国国民を勤勉かつ健康な近代国民に改造することを図り、身体政治を積極的に展開した。「中山服」の普及過程は、身体政治の展開過程とも言える。1926年7月1日に蒋介石は国民革命軍総司令に就任し、孫文の遺志を継承して、北京の軍閥統治を打倒することをスローガンに北伐の開始を宣言した。孫文による第一次北伐と第二次北伐は間もなく失敗したが、蒋介石による第三次北伐は概ねに順調に進行した。その原因について、蒋介石の国民軍が孫文を国家統合のシンボルとして宣伝したことにあると指摘された（小野寺2016：116）。孫文の死後、彼は独立を導いた国家英雄として尊崇され、国家統合において確固たる役割を果たしたと言えよう。

1928年6月、北伐が勝利した後、国民政府は孫文の「三段階革命論」に従って、軍政期の終了及び訓政期の開始を宣言した。蒋介石は訓政時期において、中国国民党が国民を代表し、政治的諸権利を行使すると述べ、党の指導思想は国民の指導思想である。各社会団体は党の一員であり、軍隊のように党の指示を無条件に実行しなければならないと表明した⁽²⁶⁾。そして、1931年に公表した『中華民国訓政時期約法』（憲法に相当）でも、同じような主旨を明記した⁽²⁷⁾。

明らかに蒋介石は中華民国の政治体制を「政党国家体制」に移行しようとしていた。「これによって、国家のシンボルと党のシンボル、国家に対する忠誠と党に対する忠誠の一元化が図られ…「党化教育」が提唱された」（小野寺2017：132）。

この党化教育の実施過程において、中山服の着用も重要な一環であった。

(25) 懐化市志編纂委員会編1994『懐化市志』生活・読書・新知三聯書店 第798頁
「鎮雄県志」『中国地方志民俗資料彙編』西南巻（下）書目文献出版社 第753-754頁
和政県志編纂委員会編1993『和政県志』蘭州大学出版社 第422頁

(26) 「中国建設之途徑」張其昀主編1984『先總統蔣公全集』第1巻中国文化大学出版社 第558頁

(27) 中国国民党中央執行委員会編1931『中華民国訓政時期約法』中国国民党中央執行委員会 宣伝部発行

蒋介石はまず党内及び政府内部で繰り返し中山服の着用を要求した⁽²⁸⁾。そして、学校教育の中でも「中山服」を取り入れ始めた。1927年4月に南彙県は「党化教育実施弁法」を公表、全県の教職員及び学生に一律に中山服を着用し、以前の長袍馬褂を廃止すると命じた⁽²⁹⁾。1927年8月に、上海中学校が「次の学期では、国を救う健全かつ革命的な青年を育成する為に、体育を重視し、全校の学生は中山服を着用すべきである」と通告した⁽³⁰⁾。1936年に国民政府教育部は「学校の教師及び職員は中山服の着用を原則とする。…学生の制服も中山服で、帽子をかぶる、帽章の紋様は国民党のシンボルマークを使用する」との指示を各学校に通達した⁽³¹⁾。教育部の指示を受け、中山服を学生の制服とすることが風潮となり、福建省徳化師範学校や天津官立中学校、江蘇省私立又平職業中学校などは学生の制服を中山服にした⁽³²⁾。

児童には「中山服」はやや老成しているデザインであるにもかかわらず、小学校でも中山服が流行し、校内のコンテストにおいて、中山服を賞品とする学校も現れた⁽³³⁾、書店でも中山服を販売していた⁽³⁴⁾。教材では、「中山服」は完璧な衣装だと書かれた⁽³⁵⁾。党化教育を強化するため、国民党は学校教育以外に童子軍 (Boy Scouts) を作り、青少年の余暇を利用して準軍事化の教育を展開した。童子軍への思想教育は主に孫文の「三民主義」、「蒋介石の言葉」及び旧儒教の倫理道徳に依拠していた (田耕2011)。童子軍さえ、中山服の着用が要求されたケースがあった。例えば山西省婁煩県第二高等小学は学生に中山服と童子軍の制服の併用を要求した (李潤宇など1987)。

(28) 「蔣院長提唱中山裝」『立報』1935年12月31日第3版

「蔣院長令飭公務員穿制服式様為中山裝」『中央日報』1936年2月19日第2版

(29) 「教育消息：南彙擬就党化教育実施弁法」『申報』1927年4月18日第8版

(30) 「上海中学校注重体育」『申報』1927年8月22日第8版

(31) 「教育部訂定的高中以上学校軍事管理弁法」(1936年1月)『中華民國史檔案資料彙編』第五輯第一編教育(二)第1314-1316頁

(32) 江中衛1992「抗日戦争时期的徳化師範」『徳化文史資料』第13輯

劉家俊・汪桂注1989「回憶母校天津官立中学」『天津文史資料選輯』第27輯 天津人民出版社。県政協文史弁公室「豊県私立職業中学簡介」『豊県文史資料』第8輯

(33) 黄一徳1931『紀念日的日記』上海兒童書局 第50頁

(34) 「小学生中山裝」『申報』1928年5月23日の広告

(35) 蔣鏡芙編1931『新中華社会課本』第5冊の第11課 中華書局

1934年2月、蒋介石は江西省南昌で「新生活運動」を展開した。この運動は礼・義・廉・恥という伝統的な道徳を価値観の中核に据え、国民生活の「軍事化・生産化・芸術化」を目標とし、「整然さ、清潔・簡素、迅速・確実」を実施原則とし、それを「衣・食・住・行」など人々の日常生活に具現化することによって、民族の復興を目指したのである。新生活運動の指導文書「新生活須知」の中で、衣服を整えること、衣服を清潔にすること、ボタンをきちんと留めること、綻びがあったらちゃんと繕うことを細かく指示した。そして、人々の日常生活における举止動作が合致しているか否か、監視と検閲が頻繁に行われた（深町2013）。この中で、中山服着用の規定を違反し、スーツや長袍馬褂を着用した教師を見つけた場合、学校は教師に対しては奢侈を厳禁し、必ず中山服を着用するよう厳しく批判したケースもあった⁽³⁶⁾。

このように、蒋介石政府は毎日の「中山服」の着用を通じて、身体管理を行い、規律性やナショナリズムの育成を図るだけでなく、「国民党」＝「国家」という党国一体化の思想を可視化させ、浸透させた。「新生活運動は伝統道徳を手段に全体主義（totalitarianism）を目指す運動である」（Arif Dirlik 1975：975）。学校では新生活運動と「中山服」はセットしたような装置として使われた。蒋介石政府は人々の身体を管理・統制することで愛党愛国の精神を育み、国家に奉仕できる近代国民の育成を図った。これはまさにフーコーの訓練（discipline）と生命政治（biopolitics）理論の実践だと言えよう。蒋介石政府の党国一体化の思想及び民俗を利用してナショナリズムを高騰させる手法は後の共産党にも引き継がれた。

しかしながら、孫文が西洋の基準に則って近代西洋化を目指していたのとは異なり、蒋介石が目指していた中国は、思想や道徳の層面では伝統への復帰という復古志向を持っていた。新生活運動は伝統的な価値観を中核に置くことがこの志向を明白的に示したが、1929年に公表された『民国服制条例』において、長袍馬褂を国民の礼服とすることを維持したのもその表現の一つであった。

(36) 民国広西省政府教育庁導学室編1934年『広西省政府教育視察団教育視察報告』第297-298頁

まとめ

19世紀末から20世紀初頭にかけて、清王朝の衰弱や外国の列強による侵略という現実を受けて、多くの政治エリートおよび知識人たちは中国における近代国家建設の方法を考えはじめ、多様な強盛国家の構想が競合し、それと関連する服装改革の気運も高まっていた。

辛亥革命が勝利した後、孫文をはじめとする革命派は新国家のビジョンを実践に移すと共に「剪辮易服」を実行した。さらに国民の服装を規定する「服制条例」を公表、「中華民族」を具現化するための「中山服」を創出した。

本稿は近代中華民国の成立と共に「中華民族」とその象徴である「中山服」がどのように登場し、定着したのかを詳細的に考察することにより、脱植民地の国民国家の樹立と中華民族の形成を目指した中国ナショナリズムの始動とその内包していた矛盾を明らかにした。

中国ナショナリズムに影響を与えた孫文及び蒋介石の思想は、中華人民共和国の成立によって中断されることなく、往還を繰り返して今日まで影響力を保ち続けた。今日の中国共産党は、蒋介石政権とほぼ同じような倫理と手法を用いて一党独裁を正当化している。習近平政権が推奨している「優秀传统文化の継承と発展」や「民族の偉大なる復興」などの政策は蒋介石が推奨していた新生活運動と若干の類似点があり、传统文化に強盛国民の形成の原動力を求める歴史の系譜は、中華民国時代にあったと言える。

20世紀後半からは世界経済グローバル化の潮流が始まり、ブルース・リーやジャッキー・チェンの映画の影響もあり、海外では他者として認知された「中華民族」は、満清から引き継がれた「長袍馬褂」の姿である。この「異郷的」で、「伝統的」な風情溢れる、欧米人とは対照的に存在している中華民族の姿は、オリエンタリズム (orientalism) の生産物だとも言える。一方、国民服とされる中山服は、当初から歴史の伝承性がないという天然的な欠陥を抱えているため、次第に冷遇された。しかし、満清から引き継がれた「長袍馬褂」もまた「漢族排除」という歴史を内包しているため、中国ナショナリズムの高騰に伴い、内部からの反発を招き、漢服運動を誘

発したと考えられる。

参考文献：

日本語文献

- アーネスト・ゲルナー著、加藤節監訳 (2001) 『民族とナショナリズム』 岩波書店1
- 小野寺史郎 (2017) 『中国ナショナリズム—民族と愛国の近現代史』 中央公論新社
- 権学俊 (2018) 「近代日本における身体の国民化と規律化」 『立命館産業社会論集』 第53巻第4号31-48
- 坂元ひろ子 (2016) 『中国近代の思想文化史』 岩波書店123
- 西村成雄 (2000) 「序章 20世紀史から見た中国ナショナリズムの二重性」 西村成雄編 『現代中国の構造変動3 ナショナリズム—歴史からの接近』 東京大学出版会26
- 深町英夫 (2013) 『身体を躰ける政治：中国国民党の新生活運動』 岩波書店
- 深町英夫 (2016) 『孫文—近代化の岐路』 岩波書店
- ベネディクト・アンダーソン (1997) 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』 NTT出版44
- 丸山眞男 (2006) 『現代政治の思想と行動』 未来社279
- 村田雄二郎 (2000) 「20世紀システムとして中国ナショナリズム」 西村成雄編 『現代中国の構造変動3 ナショナリズム—歴史からの接近』 東京大学出版会60
- 吉澤誠一郎 (2003) 『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』 岩波書店

中国語文献

- 安毓英・金庚榮 (1999) 『中国現代服装史』 中国輕工業出版社1
- 袁仄・胡月 (2010) 『百年衣裳—20世紀中国服装流變』 三聯書店
- 王東霞編著 (2002) 『從長衫馬褂到西装革履』 四川人民出版社
- 喬沁钰 (2010) 「從民国時期国貨運動看近代中国的民族精神—以1915年北京地区為例」 『資制文摘』 2010年第5期16-17
- 喬雲霞 (2004) 「明眼旁觀滑稽劇—讀黃遠生通訊『囍日日記』」 『佳作賞析』

2004年第一期 34-36

- 邱巍 (2000) 「辛亥革命後の“剪辮易服潮」『史林』2000年第二期 82-87
- 吳知 (1936) 『鄉村織布工作的一個研究』商務印書館 219
- 尚明軒主編 (1998) 「孫中山の歷程：一個偉人和他的未竟事業」解放軍文芸出版社 598頁
- 周作人 (1994) 『知堂書信』華夏出版社 154
- 田耕 (2011) 「新生活運動緣起新探——以南京政府童子軍運動為視角」『理論界』2011年第3期 124-126
- 湯志鈞編 (1981) 『康有為政論集』中華書局
- 馬多思 (2011) 「鄒容の「革命軍」：震落皇冠的第一声驚雷」『中国新聞周刊』2011年第37期 24-26
- 楊奎松 (2020) 「問道于器——辛亥以來國人着裝“西洋化”的成因與經過」『近代史研究』2020年第五期 25-45
- 林語堂 (2000) 「論西裝」林桓・袁元編『講穿』海南出版社 66
- 林昊民・甘滿堂 (2000) 「身体史視角下的“易服運動”——以民國時期中山服為例」『福州大學學報』2020年第4期 32-37
- 李潤宇・閻門 (1987) 「回憶母校——婁煩第二高等小學」『婁煩文史資料』第2輯。
- 劉建民 (2022) 「服裝與政治：近代以來服裝變革中的政治記憶」『服飾導刊』2022年第11卷第2期 17-23

英語文獻

- Arif Dirlik.1975.The Ideological Foundation of the New Life Movement: A Study in Counterrevolution, *The Journal of Asian Studies*, Vol.34, No.4:975.

Examining the Rise of Chinese Nationalism through the Zhongshan Suit

Zhang ling

This paper examines in detail how the ‘Chinese nation’ and its symbol, the ‘Zhongshan suit,’ were created and developed with the establishment of the modern Republic of China, and why Chinese nationalism, which aimed at the formation of a decolonized nation-state and the Chinese nation, is so closely related to clothing. By doing so, it reveals the contradictions inherent in the initiation of Chinese nationalism and its impact on the later People’s Republic of China.”